琵琶機関紙
京紘
第二八一号　京紘社

我が道を行く六十五年（五三）

西郷天風

さて、それは昭和四年十月も央ばの頃だった。正紘会から水戸の私の処へ案内状が届いた。鹿児島の萩原竜洋先生が上京されたので、来たる二十九日、赤坂田町の藤井先生方に於いて歓迎会が催おされるにつき参会あり度しとのことだった。

藤井先生と云えば、かって皇居に於て、御前演奏の光栄によくした四元義一先生の令弟、四元義次先生であり、其芸風は令兄より気魄に富む、といわれる名手で、後に藤井家を継ぎ、東京赤坂の田町で歯科医を本業とし、傍ら琵琶界の後進育成につとめておられるその医院の二階で、萩原先生の歓迎会が催おされ、在京の斯界人はこぞって参会、私も水戸から馳せ参じ末席を汚した訳だが、宴たけなわの折柄、一杯機嫌の吉村岳城師、例によって例の如く、私にも、からんで来た。

〃オイ天風、貴公近頃、小田原、貴島、林竜山等と水戸で盛んに会をやっているが、僕の処へはいつ、お鉢が廻って来るのかな〃

私は応酬した。

〃ほう・・・之は意外な言を聞くものかな、吉村岳城程の名人ともなれば、水戸の如き田舎町など眼中に無いものと思ったが〃

と云えば彼れキットなって、

〃僕だって行って見たいよ・・・聞けば客席の空気がえらい「厳粛」だと云うが・・・〃

（それもその筈、賛助員の筆頭、県庁の三部長といえば県内で上位にある人物、その中でも内務部長森岡二郎氏の如きは、五高出身で大の琵琶ファン。そのお声がかりの会と云うので、七十余名の賛助員がこぞって聴衆の先頭に立てば、聞くほどに名手の演技も味わい得て、いよいよ魅せられつゝあったのである。）

〃それ程水戸に来たいのなら、過日林平春氏に頼んで申し込んだ時、なぜ来て呉れなかったのか〃と問えば、そんな事知らんよ、大体林平春には暫く逢ったこともない、というので、結局次ぎの機会に実行を約して、翌五年の三月末、水戸一の劇場常磐座に於て、岳城師歓迎の大会を開催した。

この時は丁度我が大日本琵琶国風会の五回目に当り、かの錦心師歓迎大会から三年目というゆかりのある時で、しかも小田原、貴島、林竜山等第一級の琵琶人によって鑑賞力が高まりつゝあった。そこへ錦心師と対等の人気を背負う正派人吉村岳城師出演と云うので、錦心師と同様県下のファンに大センセーションを捲き起したものか、地方からは泊りがけのファンも多々押寄せ、こんなことなら二た晩つゞきの催しにすべきだったと歎息をもらす始末だった。

ところで、その当日は折悪く客足がつき初めた頃から、突然天候あらたまって車軸を流さんばかりの豪雨が降り続くこと約一時間、折角よい席を求めようと早めに馳せ来った数十名は、常磐座の木戸口にあふれて、小道をへだてた前の家の軒下に佇んだまゝ足止めされ、後から来る傘の人達で細い道路は通行止めとなる騒ぎに、劇場の木戸はようやく開かれ、傘をたゝみ乍ら木戸を這入る姿を目前にして、ただ土砂降りの雨を恨めしそうに眺めているのが、先に来た客達の姿だった。

だが、それも五時頃には忘れたように晴れあがり、雨後の爽快さは亦格別だった。

かくて客足はますます繁く、客席は開演時間前既に満員となり、桟敷もその下も人垣で文字通り立錐の余地無き有様で、勢い開演時

各氏演奏。（演奏なし）伊吹正陽、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、古谷竟水、荒木旭嬢、水内嬢水諸氏。このあと一水会京都支部と共催十二月十一日の演奏会の打合せその他を協議し近くのレストラン京みやこで食事を共にして七時散会した。尚林田、戸倉、戸田、若宮、山本、山岡、坂本、木下、峰口の九会員欠席は残念であった。

第二回飴谷六水氏リサイタル

十月十五日(土)夕五時東京銀座ガスホール、主催飴谷六水氏、後援錦心流琵琶一水会（千円）。重衡｜山田六紅▼白虎隊｜橋本登水▼舟弁慶｜二反田岳水▼滝口入道｜松田静水▼河中島｜山口速水、荻野甲水、宮原琿水、以上助援の外○地震加藤○花の若武者○詩踊石童丸○富樫の涙の四曲を飴谷六水氏が熱演され成功をおさめた。

薩摩琵琶正紘会秋季大演奏会

十月十六日(日)正午東京銀座交詢社ホール、七卿落｜水越▼桶狭間｜岩屋▼蓬莱山｜池野谷吟岫▼武蔵野｜清川嵐舟▼本能寺(上)｜吉田央舟▼同(下)｜石田錦穂▼城山｜根本岳邦▼湖水渡｜本橋仙舟▼吉野落｜佐藤鶴春▼菅公｜八束一峰▼小督｜柏木篁道▼桜井の訣別｜正本溪舟▼亀山上皇｜遠藤鶴東▼白虎隊｜仲川秀邦▼小松の操｜樋口北舟▼岩崎谷｜栗原雨竹▼風流将軍｜大塚岳峻▼西郷隆盛｜柿沢篁峰▼広瀬中佐｜小野鶴彦▼弾法秘曲｜辻靖剛▼潯陽江(上)｜堀越素舟▼同(下)｜岡部錦蝶▼物狂｜岡尾鶴城▼文天祥｜平井春嶺▼小敦盛(二)｜山本鶴声▼門琵琶合奏｜右志。

筑前琵琶橘会全国大会

●十月二十二、三両日北九州市福祉文化センターホール。

錦心流琵琶演奏会

●十月二十三日(日)逗子市立図書館ホール。平野鉦水氏五十周年記念。同氏主催（次号詳報）

第六回琵琶と詩吟詩舞の会

●十月二十三日(日)西宮市夙川公民館松下ホール、主催一水会神戸支部・蓮水会（次号詳報）

筑前琵琶演奏会

●十月二十三日(日)福岡市大博多ビル、主催筑前琵琶保存会。（次号詳報）

筑前琵琶旭会全国大会

●十月二十八、九両日(金)(土)神戸市県民小劇場（次号詳報）

故東憲水、藤原英水両氏追悼演奏会

●十月三十日(日)大阪西区民センターホール、主催錦心流一水会大阪支部。（次号詳報）

普門義則（史城）氏テレビ放映

十月二日(日)夜八時NHKテレビ大河ドラマ〃花神〃で鹿児島の青年武士に扮して半田、和田二女性と共に薩摩琵琶の演奏を放映された。（再放送は十月八日昼一時二十分）

伊藤啓水（源一）氏

かねて病気加療中のところ五月五日惜逝、享年六十七。氏は昭和七年若月滴水氏に師事、新潟琵琶協会幹事長、副会長。三十五年一水会新潟支部創立以来幹事長の要職にあって企画運営を司り今日の発展に寄与した功蹟は大きい。謹んで哀悼の誠を捧げ御冥福を祈る。（新潟市粟山三九九番地）

山元旭錦（錦城）女史

筑前琵琶橘会宗範の同女史は九月二十五日脳血せんのため東京日赤中央病院にて逝去、享年七十一。琵琶・詩吟界に尽くされた功労者。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

（予告）

○…赤心流琵琶秋季演奏会　十一月三日(休)朝十時静岡市城内、県婦人会館。地元の外東西の各流派名手数氏賛助出演。

○…錦心祭全国大会　十一月四、五両日東京銀座ガスホール。（四日十時演奏会、五日総会、役員改選、懇親会）。主催一水会本部。

○…京都琵琶協会十一月定例茶話会　十一月十九日(土)昼一時本部平井春嶺氏宅。

○…琵琶三ツ和会演奏会　十一月二十日(日)正午京都東山松原上ル安井金比羅会館。旭濤会、旭美津会、春嶺会合同の会で新進気鋭競演の外三会長の模範演奏。

きがとあ

さわやかな空気のうまい秋、燃えるような美しい紅葉の秋、落ちついて燈下に琵琶を奏するの秋●琵琶奏者は口と手を借りて心で奏するもの、聴者は耳を借りて心で聴くもの●歌は奇麗な声で節廻しも間（ま）の取り方も上手、紘は音締めが充分で豪壮繊細な弾法●これらは勿論のことであるが紘も歌も心の籠らないものは琵琶としての価値がない●邪念を払い歌中の人物、環境に浸り切り無我の境地に立って演奏することこそが大切である●と、筆者は昔、先輩から諭された●物思う秋である。

昭和五十二年十一月一日発行（非売品）
編集者　植村　寛
発行所　京紘社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話〇七二六（七三）六〇五一番

間も早まること約二十分、いよいよ露払いの地元三名から、天風を経て貴島、小田原、林竜山月と、いづれも東京などでは見ることも出来ぬ程、真剣味溢るゝ演奏に心打たれ勝ちの岳城氏、出演間ぎわに吐くいつもの冗談もどこえやら。

演奏台に坐しておもむろに「蟠竜山に立ち昇る、雲はのろしの峯をなし、勃海湾に打寄する、波に鼓のひゞきあり。」と語り出せば、満場さながら水を打った如く静まりかえった中から呻くが如き力のこもった掛声がそちこちから起れば、流石の岳城師、全身汗みどろとなって楽屋に戻るなり、

〃こんなに、糞真面目に唄ったのは初めてだ、東京などのように、気楽に唄ってはおられんよ、恐ろしい雰囲気の会場だ。〃

と云いながら大いに気を良くしていたが、翌朝、私の家に泊った三人と共に食卓を囲んで居る処え飛込んで来た岳城氏曰く、

〃君達はひどいよ、僕一人をのけ者にして〃ひどいじゃないか、一体君達はどこえ泊ったんだ、あの旅館には僕一人だったじゃないか〃と、えらい剣幕であった。

〃いやー、すまん〳〵、この三人は国風会の同人なので此処で雑魚寝さ、岳城氏は客人だから客扱いしたのだが悪かったかなあ〃

それからは、春雨のそぼ降るなかで昨夜の慰労会にあらため、めづらしい顔合せの折の祝宴は夕刻まで続いたが、各々天下一の名人気取りで吐く気炎は、中々消えそうもない風情だった。

但馬守平経正の〃琵琶塚〃

辻　旭　城

〃祇園精舎の鐘の声、諸行無情の響あり〃の名文ではじまる平家物語のあとを訪ねて、筆者は取材の旅に出た。

平家の侍大将宗盛が、一の谷の合戦に敗れた兵を集め、瀬戸内海を渡って屋島に逃れたのが八百年の昔のこと。爽やかな朝の船旅のなかで、移り変わる時の流れに反し、今尚変わらぬ海の匂いは昔の儘で残されている。源平合戦が繰広げられた屋島、壇の浦の夕映えを船上から愛でたあと、山上で一泊したのが印象的であった。

諸先生方の平家物語の著書を読んだが、異本も多く歴史事実と矛盾する点も多々あるが、吉川英次先生の新平家物語は、一層文学的な処が多い。昭和二十九年夏、先生は郷土史家渡辺武氏の案内で源平史跡を調査され、その紀行文中で義経鵯越えは川辺説を採用され、〃生田の森は戦災で焼失した〃と書かれているが、実際は巨楠に芽がふき亭々と繁っている。源平合戦について平家の創作の苦闘がしのばれ、鵯越えについても作家の間で、諸説ふんぷんとしているそうである。

中国地方の平家探訪のあと、神戸の史跡を調べてみたが、平家物語に関係のある神社、仏閣の多いのに驚く。神社十六社、寺院十ケ寺、それに神戸築港の魁となった清盛の経ケ島の史蹟など二十数ケ所にも及んでいる。

八百年の昔、経ケ島を築いて兵庫港を設け、神戸市今日の繁栄の基礎を作った清盛の功蹟に対し、昭和四十三年十月、神戸開港百年祭を記念して、清盛法衣姿の高さ五尺の台礎の上に銅像が建てられた。

その東に〃琵琶塚〃が在る。清盛の弟参議正二位備中守平経盛の嫡子、但馬守経正の塚である。碑は巨大な石材で、表面に太宰府宮小路景文が雄渾の筆を揮った〃琵琶塚〃の三大文字が深刻され、裏面には明治三十五年十一月建之と勒してある。この碑は摂津名所図の挿絵にも見られ、元は十三重の塔より少し離れた地点にあったが、数年前現位置に移されたものである。

経正は、寿永三年二月一の谷の合戦でこの地に討死したと伝えられているが、真偽は別として平家物語は経正の事につき、次ぎのように記されている。

修理太夫経盛の嫡子、皇后宮亮経正は、幼少の時より仁和寺の御室の御所に童形（ちご）にて候われしかば、かかる悲劇の中にも君の御名残屹と思い出でまいらせ、侍五、六騎召し具して仁和寺殿へ馳せ参じ、門をたたかせ申し入れられけるは、「君既に帝都を出でさせ給い候いぬ、一門の運命今日既に尽き果て

候いぬ。憂世に思いおくこととては、只君の御名残ばかりなり。八才のときこの御所へ参り始め候て、十三にて元服仕り候いし迄は、聊相労わることとの候わん外は、白地に御前を立ち去ることも候わず、今日既に西海千里の波路に赴き候えば、又いづれの時必ず立帰るべしとも覚えぬこととこそ口惜しう候え。今一度御前へ参って君をも見参らせとう存じ候えども、甲冑を装おい弓箭を帯してあらぬよそをいに罷りなって候えば、憚り存じ候」と申されければ、御室哀れに思し召して、「只その姿を改めずして参れ」とこそ仰せけれ。経正その日は、紫地の錦の直垂に萌黄匂の鎧着て、長覆輪の太刀を佩き、二十四差いたる切生の矢負い滋藤の弓脇に挾み、兜をば脱ぎて高紐にかけ御前の御坪にかしこまる。

御室やがて御出ありて御簾高くあげさせ〃これへ、これへ〃と召されければ、経正大床にこそ参られけれ。供に候藤兵衛尉有教を召し、赤地の錦の袋に入れたりける御琵琶をもって参りたり。経正これを受け御前に差し置き申されけるは、「先年下し預りて候いし〃青山〃持たせ参りて候、名残りは尽きず存じ候へ共、さしもの我朝の重宝を田舎の塵になさんこと口惜しう候えば、参らせ置き候。若し不思議に運命開けて都へ立ち帰る事も候はば、その時こそ重ねて下し預かり候わめ」と申されたり。（中略）

経正は十七の年、宇佐の勅使を承って下されけるに、その時〃青山〃を賜って宇治へ参り、御殿に向い奉りて秘曲を弾き給いしかば、伴の宮人おしなべて衣の袖をぞ絞りける。

かの〃青山〃と申す御琵琶は、その昔仁明天皇の御宇、嘉祥三年三月に掃部頭貞敏渡唐のとき、大唐の琵琶の博士廉承武に逢い、三曲を伝えて帰朝せしに、その時〃玄象〃〃獅子丸〃〃青山〃の三面の琵琶を相伝して渡りけるが、竜神や惜しみ給いけん波風荒く立ちければ、獅子丸をば海底に沈めぬ。今二面の琵琶をばわたいて我朝の帝の御宝とす。

村上の聖代応和の比をい、三五夜中の新月色白く冴え、涼風颯々たる夜半に、帝、清涼殿にて玄象をぞ遊ばされける。時に影の如くなる者御前に参じて、優に気高き声にて唱歌をめでとう仕る。帝、暫く御琵琶をさしおかせ給い「抑も汝は如何なる者ぞ」と仰せければ、「これは昔貞敏に三曲を伝え候いし大唐の琵琶博士廉承武にて候が、三曲の中に秘曲を一曲残せる罪によって魔道に沈淪仕る。願わくばこの曲を君に授け参らせて仏果菩提を生ずべし」とて、御前に立てられたる青山を取り、転手をねじてこの曲を君に授け奉る。三曲の中に上玄、石上これなり。

その後は、君も臣も恐れさせ給いて、遊ばし弾く事もさせ給わざりしを、仁和寺の御室の御所へ参らせ給いたりしを、経正最愛の童形たるに因って下し賜りけるとかや。甲は紫藤の甲、夏山の峰の緑の木の間より有明の月の出でけるを挑面に書かれたる故にこそ〃青山〃とは名付けけれ。（下略）

続・私の音楽ノート（二〇）

水藤五郎

稽古について

稽古にもいろいろあるようで、厳しい稽古、甘い稽古、その中間等、さまざまです。

現在の傾向は、厳しい稽古からは少し隔たりの感を抱くものがありますが、その結果として、良い技量や、正しい芸術感を得ることが出来ないとしたら、稽古についても再考をしてみなければならないでしょう。

戦前の稽古は一般的に量が多かったようで、稽古所なども、毎日教えたり、一週間の中に三日位などはごく普通であったとのことです。今日では一週間に一度、多くて二度が一般的な稽古指導量で、その結果、技量の向上に若干の問題が生じています。

琵琶界の例をとってみても、戦前の人々は相対的に技量が高かったように思えます。それが稽古指導の量に関係があると想像することは、あながち間違いとは云えないようです。

一週間に一度、稽古を受ける人々の中から、優れた斯界人を育てることはなかなか難かしいことです。加えて、厳しい稽古でなく甘い稽古なのです。

この様な、稽古指導量の不足が、優秀な弾

奏家を育成し得ない原因であると断定することは危険でありましょう。つまり、稽古日数の減少は琵琶界だけでなく、社会一般の流れとなっているのであります。がその反面、箏曲や三絃の世界では、技量の低下は少なく、むしろ向上していると評されています。又、洋楽の分野では、日進月歩の動きであります。これは何故なのでしょうか。稽古日数や、超人的名人の無などの問題では、斯界と同様であり乍ら、他の芸能はレベルアップがなされている。この点についてよくよく考えてみる必要があると思います。

まづ第一に考えられるのが、稽古の質についてでありましょう。量が少なくても、質が良ければと云うのが社会通念でありましょう。

元来、琵琶楽は一人の芸、即ち、個人芸であることから、一人よがりになる傾向がありました。合奏や併奏の芸能では、共演が主でありますから、当然、勝手な演奏は許されないわけです。ですから、音高、音速、又、間（ま）等にも考慮が払われて、上手、下手以上にそれが大切であるわけです。この点琵琶楽は、上手であることが大事であって、共演性は一向に育たない傾向でありました。

こゝに二人の下手な音楽人がいます。一人は箏を弾き、一人は琵琶を弾くのです。技量は共に聴く値の無いものなのですが、箏の方は間（ま）や、音の高さ等には一応の心得があるように思えます。もしこゝに私共が居合わせたら、やはりこの箏の方に好感を抱くでしょうが、その一方で、この琵琶のあり方について深く洞察もすることでしょう。

琵琶にありがちな〝一人よがり〟を如何に是正してゆくかが整理されなければならないのです。端的に云えば、落語とか、琵琶のような一人芸の社会は、まとまりが悪いのが現実で、落語の世界では、二つの団体に分かれていますし、斯界では、百花瞭乱の感があることは現実のことであります。この点が問題です。音楽の三要素にハーモニーが挙げられる今日、共演性をもたない一人芸の道は険わしいと云えましょう。

調子の合わない弾奏を非難することは簡単ですが、そうした結果を生み出す段階、稽古の時点に於いて、絃と絃とのハーモニー、歌と絃との共調性が訓練されなければならないわけです。稽古の質を考える時、この共調性が育つための稽古指導が肝要でありましょう。

落語が一人芸であることは前述しましたが、その稽古方法について一つ学ぶべき点があります。それは多師主義であると云うことです。勿論、落語の稽古はプロの稽古でありますから、それは一般の愛好者を対照とした時の稽古には、全面的には適用できないのでありますが、多師指導が制度として確立していることが、落語の演者技量を支えている因であると云えましょう。

三遊派であろうと、柳家派であろうと、その演題を得意としている人に教えを乞うと云うことは、芸修業には最上の道であります。この意味では、共調性を失っていないわけです。一人よがりにならないわけです。話術が多面的になるからであります。斯界の稽古では、最近まで、薩摩なら一生薩摩、筑前は一生筑前のみとのことでした。しかし、これが正しいかどうか、筑前でも薩摩でも、ある程度教育をして、琵琶楽について見識を与える方法がとられる日々がこないのでしょうか。その為には、楽譜の問題が生じてきますが、二、三の著作がなされたとの朗報があるのはうれしいことです。

（つづく）

わが師友を語る

田中歡水

○

榎本芝水先生の高弟である岩田絹水さんは、その性格の如く豪放な芸風をもって人気があった。得意の曲は〝九連城〟〝川中島〟〝山科の別れ〟それに〝城山の月〟をよく弾奏されました。故河瀬兄の初七日でも〝城山の月〟の一曲を捧げられた。岩田さん宅を野尻摂水さんと御一諸したのは、もう二た昔も前のことになる。丁度その時は御子息、それに俳句で高名の奥様ともども御留守で、三人で楽しく夕食をとり風呂にも入れてもらって芸談に花が咲きました。当時は琵琶も盛んで夜半に及びました。芝水先生のテープを沢山お持ち

で、共に聴かして頂いたのを覚えている。松田静水名人の〝黒田武士〟を拝聴したようにも思います。琵琶人の中には恐妻型が多いようであるが？　その日の楽しそうな岩田さんの容姿が今もなお目に浮かぶ。小生初めて訪問し、宿泊する仕儀とは相成った。岩田さんの温情にほだされたからに外ならぬ。〝勧進帳〟の掛合いは素晴らしく正に圧巻であった。今は亡き蔵本司水、馬瀬槍水、岩田絹水、河瀬碩水の四師による演奏であった。岩田さんの告別式で、故人お得意の〝山科の別れ〟のテープが流されたが、哀しくも亦なつかしく今も耳に残っている。

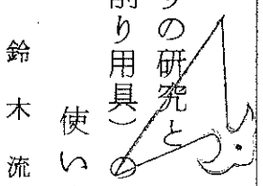
○

清水史水さんは文字通りの熱血漢であり、その個性ある芸風は聴く人の心奥深く印象づける名演奏であった。自作〝鉄拐山道場〟〝武藤山治礼賛〟〝若き敦盛〟等、正に圧巻であった。死の前にゲストとして研修会を催してほしいと小生に切望され、その機会を待たず急逝されたのは洵に残念でもあり、亦清水さんに対し相済まない事と思っている。琵琶に対する異状とも思われる執念、その強烈な性格は正に肺腑を刺すの弾奏で人気があった。京阪神の各流琵琶人を招き、舞子会を主催して研究と親睦に尽力された。小生も同会に出席したが、源平合戦名勝の地、須磨の浦をひかえて何よりの感激であり、亦歓びであった。

畏友今や亡し、故人となられた絃友の方も、小生にとり良き師でもあった。御冥福を祈るや切なるものがある。

サワリ取りの研究と小刀（削り用具）使い方

鈴木流泉



薩摩琵琶の音色・余韻の良否は、絃が接触するコマ（柱）の表面の、スキ間のアキ方で決まります。（転軫1テンジン1上の鳥口1トリクチ1も同じ。）

アキ過ぎは勿論不可。又、絃とコマの平行も、コマの半行も、コマの下部が高いのも共に「不可」です。コマ巾の2/3くらいより、かすかに下に向って傾斜しているように削り取ると、良い余韻が出ます。

特に注意する事は、使用する材質（主として朴材1ホウザイー）がやわらかいので、折角サワリを付けてもながもちせず、絃道がコマ角（かど）に深くついて、絃も亦切れ易くなります。依って事前に、コマの両角を強く丸目に押しつぶしてから、サワリを取るとよろしいと思います。

右のようなサワリを取っても、四の絃はよく鳴るが、三・二・一のサワリが付かないと思っている方が多いと思います。そこで考えてみてください。

緊めこむと絃が太いほど、下部に隙間が余計にできるのですから、今度は、逆にコマの上部1/3位いを下げると、太い絃の余韻もよく出るようになります。一の絃より二ー三ーと、その下げかたを少なくするのです。大干以下四ツのコマの高さが乱れていると、余韻は出ません。

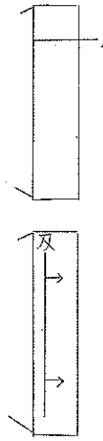
下段のコマ上に絃をおさえて、中段も上段も、その絃がスレスレにさわるように、コマの高さをきめるのが大切な事です。大干のコマは「開放絃で」一の絃との隙間を一ミリー一、三ミリ位いにすれば良いと思います。

サワリは、はじめのうちは却々思うように取れないものですが、以上を参考に研究してみてください。

筑前のサワリ付けも同じ原理です。

（昭52・9・24）

○小刀の使い方　二通り



琵琶復興へ五線譜教則本
師範・作曲家で十五年がかり
狭い伝統音楽の門広げる
衰微する琵琶楽を復興させるために――
と、この道の大家に第一線の作曲家協力し、五線譜による筑前琵琶の教則本をつくり上

げた。邦楽の世界では、ほとんどの分野が五線譜を採用しており、こんどの教則本完成は伝統音楽の狭い門をさらに大きく開くものとして、高い評価が寄せられている。

この入門書は「琵琶の教科」と題し、このほどミュージック・セリエル（〇六ー八三一ー一七五一）から出版された。著者は筑前琵琶大師範の柴田旭堂さん（58）と宝塚歌劇団所属の中元清純さん（47）。ともに神戸の出身で、十五年来の労作となる。A4判、六十四ページ。三千円。

琵琶の歴史は余良朝にさかのぼり、実に千三百年の歳月を数える。それも大正以降、とくに戦後の低迷ぶりは目に余るものがあった。楽器の研究や奏法の確立をなおざりにして来たためで、最近の古典再評価の機運に乗り、いくらか活気を取り戻したものの、昔ながらの弾譜が入門者を阻みがちだった。もともと邦楽は微妙な音色にいのちがあり、楽器になじまないとの考えも強かったが、琴や三味線はいち早く五線譜を取り入れることで、現代音楽としての再生を果たし、ひとり琵琶だけが取り残された形だった。

教則本づくりのきっかけは三十七年八月、旭堂会の演奏会で洋楽器と合奏したことに始まる。中元さん作曲の「月と折鶴」にエレクトーンとピアノが加わることになり、旭堂さんは手渡された五線譜を弾譜にひき移す作業を強いられた。女学校時代にバイオリンを習ったことがあるだけに、この作業も可能だったが、決して楽ではなかった。そのとき痛感したのが五線譜の必要性だった。

従来の弾譜は特殊な記号を使っており、一目見ただけでは音の高低が分からず、五線譜に比べて繁雑だった。なによりも、いまの学校教育になじまない。それが五線譜だと、ギターのように独習が容易になり、一年かかるけいこが一カ月ですむ。オーケストラなど洋楽器との合奏の道も開けるだろうし、現代音楽に加わることで往年の盛況を取り戻すことも夢でなくなる。中元さんもまた、三十三年に「望郷の琵琶唄」を作曲して以来、この楽器の音色に魅せられ、復活を念願としていた。

やがて、二人三脚の面倒で息の長い共同作業が始まった。なにしろ始めての試みだけに、書いては消し、考えては改める日々が続く。そして歴史と流派、構造と弾法から説き起こし、邦楽と洋楽の味を生かした五十の練習曲を仕上げたのが今春のことだった。二千の部数にすぎないが、初心者のほか、洋楽に琵琶のメロディーを取り入れる際など大いに役に立つものとされ、日本琵琶楽協会の吉川英史会長らも「この世界では画期的のこと、将来に大きな希望が与えられた」と賛辞を寄せている。

旭堂さんは六歳から琵琶を習い、三十歳で父の名を継ぎいまは日本旭会の理事として活躍している。一人娘で、宝塚歌劇団のスター上原まりも琵琶の演奏で知られる。一方の中元さんは二十七年、宝塚歌劇団に入って頭角を現し、美術祭の文部大臣奨励賞なども得ている。

（52・10・7　朝日新聞夕刊から転載。ー原文のままー。写真は省略。）

第三十八回三位研修同志会例会

九月十一日(日)昼一時三鷹市公会堂。創立六周年を迎え大村氏の挨拶があり、続いて姉妹会の武絃会員中島瀑水氏の急死に対し哀悼の冥福を祈った後左記研修演奏を行ない夕刻散会した。門琵琶・伴流謡切連弾ー錦幽、錦道▼利休の最期ー山崎錦幽▼御夢の跡ー立野岳朝▼白虎隊ー清水源城▼菅公ー八束一峰▼城山ー伊集院皷城▼敦盛ー坂本錦道▼乃木将軍ー西村暠峻▼台湾入ー山本隆水▼白虎隊ー井合桜映・絃田戸桜丸▼見学ー大和田鶴道。

堺開口神社秋祭に琵琶献奏

大阪堺市開口神社（大寺さん）では九月十、十一、十二の三日間秋祭りが斉行され境内には数十の露店が並び名物の御輿渡御と蒲団太鼓が練り歩いて人気を呼んだが、大阪琵琶同好会は之に協賛して十一日昼一時から儀式殿瑞祥閣に於て琵琶を主とした諸芸大会を開催し好評を受けた。台湾御親征ー矢野旭信▼新撰組ー辻旭城▼姫百合の塔ー石橋旭嶺▼竜の

口ー木村蓮水▼あゝ八甲田山ー田中歓水▼母の恩ー辻本、福田、絃八千代▼岩壁の母ー天津八千代。外に扇舞、民謡、琴、尺八、詩吟、剣舞、日舞、奇術等十九題。

日本芸術琵琶柏会九月例会

九月十八日(日)昼一時東京西新宿柏ビル六階。お江戸日本橋・門琵琶・伴流謡切第七弾法ー山崎錦幽▼一茶の俳味ー山本隆水▼山科の別れー坂入俊風▼羅生門ー青木早水▼坂崎出羽守ー加藤錦陽▼五條橋ー橘本草水▼城山ー杉山旗水▼橘大隊長ー長谷川錦舟▼大物の浦ー若宮旭登▼平家都落朗読ー雨宮映月。以上を終り小宴の後七時散会した。

故松本旭柳師追善演奏会

九月十八日(日)昼十一時名古屋通信ビル一階ホール、主催筑前琵琶中部橘会。別れの盃ー伊藤旭風▼鴨川の露ー森旭洋▼禅師と正宗ー佐藤旭嵐▼井伊大老ー瀬口旭晨▼鶴ケ岡ー牧野旭弘▼青葉の笛ー谷本旭観▼大楠公ー伊佐地旭勢▼茨木ー前田旭城▼羅生門ー石河旭豊穣▼大徳寺ー志水旭城▼平野国臣ー吉田旭蓮▼追悼譜噫旭柳師ー斉藤旭元、土井旭浄、旭豊穣▼源実朝ー坪内旭鳳▼西郷隆盛ー大野旭晴▼井伊大老ー加藤旭粋▼北の庄ー小川旭典▼隅田川ー岩見旭香▼彰義隊ー西村旭一声▼月照と西郷ー堀田旭甲▼（以下来賓）壇の浦悲曲ー林田旭城▼小栗栖ー板谷旭邑▼粟津ケ原ー山崎旭萃▼仏御前ー青山旭登。尚プログラム中山元旭錦女史は病気欠演（九月二十五日逝去）。

西郷南州百年祭薩摩琵琶弾奏大会

九月二十三日(木)昼一時鹿児島市自治会館四階ホール、南州神社崇敬会・薩摩琵琶同好会共催。春日野ー平田宗良▼月下の陣ー藤崎正▼岩崎谷(上)ー小沢民宏▼同(下)ー大迫正男▼武蔵野ー尾辻達志▼台湾入ー伊勢谷安江▼城山ー川野虎男、伊藤政夫、武登▼菅公ー神宮寺純紀▼真木の雫ー島津天嶺▼彰義隊ー木尾包義▼天吹と琵琶ー白尾国利、萩原道場有志▼光秀の最期ー平井春嶺▼迷語もどきー脇田南穂▼吉野落(二)ー岡部錦蝶▼城山崩(上)ー掘金義▼同(下)ー安田幸吉▼蓬莱山ー田上精市。

因みに百年祭にあたり西郷出身地の鹿児島市では上記演奏会の翌二十四日、県を挙げての記念式典など多彩な催し物が繰り広げられた。西南の役で城山で戦死した南州以下二千余柱が眠る西郷神社では朝十時半から祭礼が挙行されて約三千人が参列、西郷翁の孫吉之助参議院議員夫妻、陸軍の猛将桐野利秋、村田新八らの孫達が遺族席に顔をつらねた。

錦心流琵琶演奏会

九月二十五日(日)正午鯖江市民会館、福井県文化協議会・一水会福井支部（支部長内田景水氏）共催。静ー景月▼武士の意地ー磯美▼柴田勝家ー景洲▼河内の宿ー景湖▼石童丸ー野村蟋水▼天野屋利兵衛ー岸本港水▼井伊大老ー山脇圭水▼あゝ豊川女子ー松井弛水▼城山ー石倉堂水▼吹雪の敵ー挺身隊ー村田知水▼竜の口ー水谷充水▼曲垣平九郎ー細川辰水▼黒田武士ー西川磯水▼坂崎出羽守ー田中篁水▼新撰組ー内田景水▼（以下来賓）小栗栖ー三輪椛水▼西郷隆盛ー水谷浩水▼紅葉狩ー飴谷六水。

吟詠と琵琶 全道大会

十月一日(土)夕六時ー八時半函館市民会館ホール、函館吟詠連盟・蘇水吟詠会（会長高橋蘇水氏）共催。市文化祭協賛。琵琶母の教ー上野▼七卿落ー佐藤▼重衡ー中村▼静ー背戸▼川中島ー辻林稍水▼茨木ー高橋蘇水各氏の外吟詠、朗誦二十五題。

秋の各派琵琶名流公演

十月二日(日)昼十一時名古屋中小企業福祉会館、主催阿部勝水女史、後援琵琶芸術同好会外、春日野ー久保田▼菅公ー山本▼花紅葉ー山田▼月下の陣ー長谷川▼須磨の浦風ー会主阿部勝水▼（以下応援）粟津ケ原ー水野旭麗▼赤垣源蔵ー清水旭照▼河内の宿ー岩間寛水▼羅生門ー安江弘水▼城山ー牧南水▼項羽ー松浦旭翠▼西郷隆盛ー武田弘水▼新撰組ー西川磯水▼青葉の別れー今泉旭玲▼川中島ー丹野鯱水▼姫百合の塔ー土橋虎水▼山岡鉄舟ー水谷浩水▼桶狭間ー奥村慧水▼（以下来賓）北の庄ー石河旭豊穣▼時は今也ー平井春嶺▼竜の口ー小川吟水▼井伊大老ー都錦穂▼花の若武者ー飴谷六水▼船弁慶ー前田秋声▼伊豆の御難ー輝錦凌。外に詩吟三題。

日本琵琶楽協会の定例研究会

十月九日(日)昼一時東京文京区根津会館。（五百円）。小督ー平田由美▼小栗栖ー田中井琦水▼俊寛ー正本溪舟▼対王丸ー内田旭章▼曲垣平九郎ー大場穂苑▼山科の別れー輝錦統▼講師ーNHK山岡智博先生。

京都琵琶協会十月定例茶話会

十月十日(木)昼一時会員矢吹旭美津女史宅で開催。体育の日にふさわしい爽やかな秋晴れに恵まれ白虎隊ー馬場鴨水▼西郷隆盛ー野田炅水▼高松城ー田中鵬水▼大楠公ー桜井旭富▼西郷隆盛ー牧南水▼乃木将軍ー木村維水▼文天祥ー平井春嶺▼改作石童丸ー槌村寞水の